

最終講義要旨

## 中世ヨーロッパ商人の出自

講演者：魚住昌良

日 時：2001年2月15日

場 所：本館 213

小稿は「ヨーロッパの中世都市」という対象を通して比較史のための材料を提供するとともに研究史の大筋と新しい動向を学生諸君に解説することを意図した一連の講義\*の一齣である。

講義の前段で言及してきたように、ヨーロッパとくにドイツを中心とする「中世都市」形成の最大の推進者は遠隔地との商取引に従事した商人たちであったとするのが近時、少なくとも1970年代初期までの学説の主流であった。遍歴する遠隔地商人たちが団結を通して成功し、一定の場所に定住して誓約団体を作り、封建領主に対抗しつつ自由な都市共同体を獲得していった—これが私どもの世代が勉強をはじめた1960年ころのヨーロッパ中世都市論の伝統的図式となっていたのである。

ところでこのような商取引活動がヨーロッパ「中世の世界経済」(F. レーリヒ)とでも言えるかたちで一斉に花開くのは中世の中期であり、H. ピレンヌが「商業のルネサンス」と呼んだ現象であった。商業の「復興」ということは、その直前には商業がなかったか、ほとんどなかったこと—ピレンヌの場合は、メロヴィング朝期までは存在した西ヨーロッパの流通経済がカロリング期以降完全に衰退したとする—を意味するが、それでは新しく登場する商人たちの社会的出自は何処に求められるのか、が当然に次の興味の対象となるであろう。

文書記録のほとんどを聖職者階層に負ったヨーロッパ中世の商業活動や商人

たちの伝記記録を見出すことは極めて困難であり、上記の設問に答えるだけの史料は乏しかった。珍しいかつ貴重な例外は、聖ゴドリック（11世紀末リンカンシャー生まれ）の伝記であった。「波によってうち上げられる漂着物」を拾って生計の資を探す工夫をしなければならぬほどの貧農の子として生まれたゴドリックがやがて成功してイングランドだけでなくヨーロッパの大陸にまで足をのばす裕福な商人になったこと、にもかかわらず突然回心して隠者となり聖者とまで言われるようになった—そのために「聖人伝」が書かれて前半生にまで遡る記録が残された—というストーリーは、通常のヨーロッパ史の概説や政治史に載ることはないが、この種の問題に関心を持つ研究者たちの間ではよく知られており、ピレンヌもその『中世都市—社会経済史的試論』（佐々木克巳訳）のなかで詳しく紹介して立論の基礎としていた。

少なくともゴドリックの事例を通して私たちは中世中期の遍歴商人の一人が貧しい農民の出であったことを知るのであるが、ピレンヌは、中世中期の人口増加と結びつけながら、遍歴商人たちのルーツを、この時期に土地から引き離され農業で生きてゆけなくなって危険な放浪生活に身を任せざるを得なくなった人びとのなかに求めるというかたちで一般化を試みたのであった。

ゴドリックのような具体的な事例は他にはほとんど見出されないという弱点はあったものの、逆の反証もないままに、商人の出自を農民層、どちらかと言うと下層の農民層に求めるというのが、70年代ぐらいまで、ほぼ一般化された説明として定着していたのであるが、私自身は、次のような事情を考慮しながら、この問題に関する答えは「まだ分からない」というかたちで保留していた。

その事情というのは、60年代末期にK. シュルツが提起し70年代初期以降ドイツの都市史学界に大きな波紋を投げかけることとなったミニステリアル（ミニ家人）問題である。封建領主権力を支える重要な柱の一つとされるこの家人層が中世都市の成立・発展に一定の役割を果たしたことは、既にK. W. ニツェが150年近く前に指摘していたのだが、都市史研究の関心が、専ら都市領主に対抗する商人団体ということに向けられるなかで次第に無視されたり、それどころ

か、封建的要素のひとつとされる家人たちの存在は、自由のルーツとなるはずの中世都市の未熟さの表象として厄介視され、研究の対象から外されてきたのであった。

K. シュルツは、まずトリーアの次いでヴォルムス、ケルンなどライン沿岸地方の事例によって中世都市の成立・発展過程における大量のミニステリアルたちの存在を実証し、彼らの指導的役割を評価し、かつこのミニステリアルたちが都市商人層と利害を共有しつつ、しばしば都市領主と対立した様相を明らかにした(K. Schulz, *Ministerialität und Bürgertum in Trier. Untersuchungen zur rechtlichen und sozialen Gliederung der Trierer Bürgerschaft von ausgehenden 11. bis zum Ende des 14. Jahrhundert.* Bonn. 1968)。

シュルツのミニステリアル論は、ヨーロッパ中世都市史研究の視角にかかわる私の関心を大きく刺激した発言であったが、今日はその問題に立ち入ることはしない。私見の一端は、拙稿「中世都市におけるミニステリアル層—シュルツ学説を中心として—」(『山梨大学教育学部紀要』第5号1974年)を参照されたい。本日のテーマとの関連で注目しておきたいのは、彼が行論のなかでミニステリアルたちが自らも商取引にかかわっていたとする示唆である。

私たちがもうひとつ想起しておきたいのは、<sup>グレンツヘルスシャフト</sup>土地領主制(荘園制)研究の動向である。近時の荘園制研究は、往年のそれが中世前期の古典荘園(ヴィリカチオン制)の自己完結性を、従って当該時期の商品流通の欠如を強調してきたのに対し、ワインや塩などの地域の特産物に言及しながら、個々の荘園間の商品取引活動の存在を指摘する傾向にある。とするならば、その商取引の実務を担ったのは荘園庁の役人たち—そのなかには当然ミニステリアルたちが多数いたはずである—であり、彼らは、領主の商品を扱いながら、時には自分たちの物品をついでに商うことも可能であった。このようにして中世中期、すなわち都市の形成期にいたったミニステリアルたちは、商取引のノウハウを心得た経験者であった。

私たちは、農民層を出自とする商人ないし商人集団の存在を否定しないとし

ても、うえて見たようなミニステリアル階層を出自とする商人という可能性も考えないわけにはゆかないであろう。しかも成功の可能性を考慮に入れるならば、後者の重みはおのずと大きくなるはずである。

私がシュルツの最初の論文に接したときに脳裡をかすめたのは如上の思いであったが、その段階での設問にたいする私の答えは上述のように「分からない」であり、その後も、例えば教室でこの問題に触れるときの私の見解は依然として逡巡しながらの「分からない」であり、その分からないとする背景的事情の説明に終始してきたのであった。ミニステリアル説に行ききれなかったのは、当時のシュルツ論文では、ミニステリアルたちの商業活動に関する示唆はあっても個々の商人にかかわる立ち入った実証研究が充分ではないと考えたからである。

今日の講義では、しかしながら、もう一步踏み出して、ミニステリアル出自の可能性に大きく軸足を移す方向で、従前の通説の見直しを提唱しておきたい。ヨーロッパ、とくにドイツ学界の最新の研究動向に接した結果である。

K. シュルツは、先々学期（2000年度春学期）本学内で行なわれたシンポジウムの統一テーマに即して「シトー派修道会と都市」にかかわる研究動向を報告するなかで、同修道会の一修道院長であり、その出自がケルンの市民、しかも父親の代からもはっきりと分かるミニステリアルに属したカール・フォン・デア・ザルツガッセという人物についてやや詳しく言及した。カールは、ミニステリアルの一員であることの証明できる同名の父親ともども、ケルン市民としてマルティン地区（中世商人の集中する居住区）に居を構えて商業活動に活躍した有力市民であったが、回心して修道士になった後も、今度は修道会の要請に従ってその商業的活動に献身しなければならなかった男である。シュルツ氏がこの騎士にして市民という特異な人物に着目したのは、彼の最初のミニステリアル論文に接して以来はじまった学問的対話のなかで私が提起した質問と要請にたいする彼の応答の一環であった。

私は、研究の現段階では、通説の言う農民階層出自の商人グループの存在を

排除するものではないが、ミニステリアル層出自の商人層の活動と彼らがヨーロッパ中世都市の形成、発展に果たした指導的役割を改めて強調しておきたいと考える。と同時にこれらの商人個々人だけでなく、ドイツにおける最近の研究が示すように、組織としての修道会自体が都市とも密接にかかわりつつ中世の商品流通に関与している事実注目しておきたいと思う。

なお、商人の出自をこのように捉えなおすことは、ヨーロッパ都市論の研究視角—中世都市のイメージにも微妙な影響をおよぼすことになるであろう。敷衍する時間はないので別の機会に譲りたいと思う（筆者の考え方の大筋については、旧稿「ヨーロッパ中世都市像の転換」『アジア文化研究11（大塚久雄教授古稀記念論文特集号）』1979年；「ヨーロッパ中世都市の研究状況」『史潮』新6号1979年などを参照）。

\* 「前近代の都市と市民—西欧とアジアの比較」という題目で2000/2001年冬学期（2000年11月～2001年2月）に斯波義信教授と共同でおこなった講義。あらかじめ公表されていた筆者の担当分は

## 1. ヨーロッパ

- 1) 導入：フィレンツェの市民と堺の町人
- 2) ヨーロッパ史の時代区分と「中世観」の変遷
- 3) ヨーロッパ「中世都市」の起源論争
  - i) 中世の都市化    ii) 都市文化の連続と非連続    iii) 中世都市形成の担い手たち
- 4) ヨーロッパ中世の経済と秩序
  - i) 商業のルネサンス    ii) 遠隔地商人の出自    iii) 中世の戦争と平和
- 5) 都市の支配と共同体
  - i) 都市領主の支配と市民の蜂起    ii) 法諺「都市の空気は自由にする」の背景
  - iii) ツンフト・デモクラシー
- 6) ヨーロッパ「中世都市像」の転換

であった。最終講義で扱ったのは、そのなかの4)-ii)であり、学生たちには考えておく宿題として保留にしてあった。